



2019
vol.36

Association
Japonaise de la
Presse
Sportive



マジック



東京開幕戦
September 20th
at Tokyo Stadium

横浜決勝戦
November 2nd
at Yokohama Stadium

Canon
make it possible with canon

STABILIZER
ON OFF

AF MF

写真は進化する。

写真の理想とは何か。私たちキヤノンは、答えを持っていません。写真を撮る人、それぞれの理想が違うからです。一つ一つの理想を叶えるために、どんなシステムが必要なのか、その一心で開発を続けてきました。30年を超えるEOSシステムの歴史もまた、挑戦の連続でした。映像表現の可能性を切り拓くのはEOSでなければいけない。そのプライドと強い意志が、私たちの原動力でした。EOSの挑戦は終わっていません。その証明が新マウントを採用したEOS Rシステムです。キヤノンの光学技術を最大限に發揮させることができる、EOSの新しい選択肢。それは、表現領域を限りなく拡張させ、想像の限界を突破する力。理想を叶える力。みなぎる力を手に入れた時、あなたの写真は、進化する。

EOS R SYSTEM
NEW EOS R NEW RF LENS



TOKYO 2020
Olympic Games
PARALYMPIC GAMES

東京2020ゴールドパートナー
(スチルカメラ)



EOSは2017年9月20日に累計生産台数9,000万台、
交換レンズ(EF, RF, CN-E)は2018年12月19日に
累計生産本数1億4,000万本を達成しました。
【受付時間】平日・土 9:00～17:00(12/31～1/3は休ませていただきます。)※海外からご利用の方、または050からはじまるIP電話番号をご利用いただけない方は043-211-9556をご利用ください。※受付時間は予告なく変更する場合があります。あらかじめご了承ください。



Canon EOS R ホームページ
canon.jp/eos-r



キヤノンお客様相談センター
デジタルカラーリング
交換レンズ
050-555-90002

キヤノンマーケティングジャパン株式会社



AFC Asian Cup UAE 2019

Champions of Asia

初めて経験する
アジアのトーナメント。
そこで見えた日本代表の現実、
アジアは動いている、
東から西へ！

2019で見えた
ジャパン・ウェイとは？

文／大佳良之

決勝戦でカタールに1-3で完敗。残念な結果に終わったアジアカップ2019年UA大会だったが、日本代表のチームづくりとしては大きな前進が見られた。コンディショニング面で非常に難しいなかでの7連戦。そのすべてを、選手たちは非常に粘り強く戦い抜いた。それこそ、「森保ジャパン」の真骨頂だった。

7試合のうち6試合は、攻撃がなかなかうまく進まず、苦しんだ試合だった。準々決勝で5連勝だったが、すべて1点差の試合。

バスマスが多いうえに前線からの守備がちぐはぐでなかなかボールを奪い返せず、効果的なカウンターをかけることができなかつた。

非常に対照的だったのが準決勝のイラン戦だった。昨年のワールドカップとほぼ同じチーム、すなわち完成したチームを送り込んだイランは、間違いなく大会最強チームだった。

しかし日本はこの相手に前線から厳しくプレスをかけ、相手の守備態勢が整う前に攻め切って3-0で快勝したのだ。

どの相手にも苦しんできたこれまでの5試合とは見違えるようだった試合ぶり。イランの勝利は間違いないと予想していた海外の報道陣も、口をそろえて「まったく別の日本代表だった」と驚きの声を上げた。

だが試合後、森保監督はこう話した。「え？」どこが違うのか、逆に聞きたい。基本的にこれはこれまでとまったく同じです」やりたいサッカーがある。しかし試合には相手がいる。やりたいことができないときも

ある。そうしたときにも焦らず、あわてず、粘り強く守備をしながらチャンスを探す。森保監督が選手たちに求めているのは、そうやって1試合1試合に集中し、状況に応じながら「勝機」をつかんでいくことだつた。その観点からすれば、サウジ戦もイラン戦も変わりはないのだ。

「理想をもって、現実と向き合う」。森保監督はこうも話した。そこに新しい「ジャパン・ウェイ」を感じた。



©Tsutomu Kishimoto



©Yukihiro Taguchi

大坂なおみ NAOMI OSAKA

戦う真珠

1月の全豪決勝を制し、握手を交わしにネットに向う途中、大坂なおみはクビトワに向って小さく頭を下げた。ハイチ人の父と北海道根室出身の母、育ったアメリカと3か国を抱える彼女の中の日本が、ふと、うかがえる瞬間だ。そんな優しい仕草に、日本女性の象徴と言われる真珠が似合う。

「外国の選手たちはジュエリーを身に付けて試合をする」と祖父に話したそうだから、きっと、世界中の女性が憧れる日本の最高品質の粒を可愛い孫娘に贈ったに違いない。これをお守りのように、試合では必ず身に付けている。真珠は本来、傷つきやすく、汗や水に弱い。日本女性が冠婚葬祭で身に付けるのは大切に扱う「静」の宝石だからで、スポーツで激しく動く際、真珠を身に付けようと選ぶ女性はないはずだ。

昨年の全米、テクニックでもメンタルでも非常にタフな試合で表情が映るたびに、傷つきやすく繊細な輝きは大坂そのもので、共に戦っているように見えた。4大会初勝利にもセリーナに先ず頭を下げ、涙を流した際、「真珠の涙」とはこういう美しさの表現だろうとも気付かされた。セオリーとは少し違うかもしれないが、静から動へ、大坂が変えて見せた「戦う真珠」は特別な輝きを放ち、一層彼女に似合う。

現在は、日本登録でツアーを続けるが、今年10月、22歳の誕生日までには法律上、日米二重国籍のどちらかを選択しなくてはならないという。たとえどちらでも、彼女の内なる日本を、オフホワイトの光はずっと変わらず表すのだろう。

文／増島みどり



©Toshihiro Kitagawa

桃田賢斗
KENTO MOMOTA

進化したチャンピオン

世界ランク1位。なんて誇らしい書きだろう。世界チャンピオン。これまた晴れな輝きを放つ字面だ。

いずれも日本男子初となる快挙を、2018年にダブルで実現させたのがバドミントン男子シングルスの桃田賢斗だった。

8月に中国・南京で行われた世界選手権で、この種目の金メダルを日本に初めてもらすと、9月に開催されたジャパンオープンで優勝し、その翌週に開催された中国オープンでも決勝に進出(準優勝)。好成績を続け、とうとう初の世界1位になった。

世界ランクは1年間のポイントの積み重ねで決まるものであり、いわば持久力が試される。一方で世界選手権では、誰もがここに照準を合わせてくるという1週間でいかに集中して力を発揮できるか、

いわば瞬発力の勝負。桃田はその両方を、身長175センチ、体重68キロというごく平凡な身体に凝縮させているのだ。

ジュニア時代から天才の名をほしいままにし、ネットの白帯をかすめて敵陣にぱとりと落ちる「ヘアピン」などの繊細なテクニックでは右に出る者がいないと言われてきた。20歳を超えるとグレードの高い大会で優勝するようになり、世界ランクも2016年春には2位まで上がった。

まさかの不祥事を起こしてしまったのは、ちょうど絶頂に差し掛かろうとしていたその頃。リオデジャネイロ五輪まであと4カ月を切っていた2016年4月、桃田は違法賭博店利用問題で無期限の出場停止処分を受け、1年間、試合から遠ざかった。

国際大会への復帰は1年以上後

の2017年7月で、この時の世界ランクは282位。そこからわずか1年余りで世界ランキング1位に上り詰めたのだから凄い。そんな芸当は桃田でなければできない。

「復活というより進化できていると思う。2016年に世界ランク2位になったときよりも、今の自分のほうが強い」。そう言って胸を張りながら、過去の世界ランク1位選手と比較すると、「僕には圧倒的な強さはない」と謙虚な構えを崩さない。

となれば、トップオブトップの感概を味わうのはいつになるのだろうか。それは東京五輪なのだろうか。テクニックでも結果でも人々をワクワクさせることのできる希有な存在。桃田の歩みから目が離せない。

文／矢内由美子



©Tsutomu Takasu

新女王のルートーン

紀平梨花 RIKA KIHARA

日本フィギュアスケート今季の最大の収穫は、トリプルアクセル（以下、3A）という武器を手に入れた紀平梨花の大躍進だった。

昨季はジュニアの国際大会で女子初の3A+3回転トーループを成功させ、初出場の全日本選手権も3位になりながら、世界ジュニアは3Aが不発で8位に沈むなど調子の波も大きかった。

だがシニア移行の今季は、シーズン初戦ではSPで3Aを転倒しながら自己最高得点で1位に立つと、フリーでは連続ジャンプを含む2本を決め自己最高の218.16点で優勝。次のNHK杯もSP5位と出遅れたが、フリーは完ぺきな演技で日本歴代最高の154.72点で優勝と自信を付けた。

そしてGPファイナルでは、SPで初めて3Aを決める完璧な滑り出しをし、フリーでは1本目がダウングレードになったが2本目は連続ジャンプにしてしっかり決め、

合計を今季世界2位の233.12点にして五輪女王のアリーナ・ザギトワ（ロシア）に完勝。旧ルールを含めた歴代世界最高を上回る240点台に乗せる可能性も見せて、世界の頂点まで駆け上がった。

身体能力は高くジャンプには元々自信を持っていたが、今季は修正能力を含めて3Aの確率を上げただけではなく、そこに集中しても他のジャンプがおろそかになることがないのが大きな強み。滑りの柔らかさや表現力も向上して演技構成点も一気に上がり、ファイナルではザギトワに僅差に迫る評価をもらった。

「大技をやることで他人より転倒などが多く3Aをやらないという選択肢もあったが、今はやり切れてよかったと思う」という紀平。その成功は女子フィギュアの新しい世界を切り開いただけでなく、今後の4回転時代到来を加速させる原動力にもなるものだ。

文/折山淑美



屈辱からのグラン_dstラム。そして、北京へ

小林陵侑 RYOYU KOBAYASHI

2022年北京五輪へ向けた新たな戦いが始まる今季、世界のジャンプ界を驚かせたのは22歳の日本人選手・小林陵侑だった。膝の故障もあって不安だったというW杯開幕戦のビスマルク(ポーランド)大会では、1本目に着地で手をつくミスをしながらも初表彰台の3位になる強さを見せた小林は、次のルカ(フィンランド)大会では2戦2勝と勢いに乗った。

だがそれは序章でもあった。彼が本当の強さを証明したのは、7戦4勝で臨んだ年末からのジャンプ週間だった。前半のドイツの2戦は地元のアイゼンビヒラーに0.4点差、1.9点差と僅差で勝利す

る勝負強さを見せたが、舞台をオーストリアに移してからは爆発。インスブルックでは1本目でトップに立つと、2本目はコーチリクエストで他の選手より1段下のゲートからのスタートにしながらもヒルサイズ超えの131メートルを飛んで12.8点差を付ける圧勝。次のビショフホーフェンは4連勝のプレッシャーもかかる中、1本目4位から逆転。それまで66回の歴史を持つジャンプ週間で過去ふたりしか達成できていなかったグラン_dstラムを達成するとともに、4試合の合計ポイントでは2位で62.1点差をつける別次元の強さで、日本人としては1997~98年の船木

和喜に次ぐ2人目の王者になった。2016~17年のW杯はフル参戦しながらも総合0ポイントの屈辱を味わった小林だが、昨季は平昌五輪でNH7位、LH10位になって自信を付けた。さらに夏合宿では助走姿勢を修正し、元々持っていた跳躍力をジャンプ台にしっかりと伝える鋭いテイクオフを身に付けた。海外メディアには宇宙人と言われて驚いたと笑う小林。日本人初のW杯総合優勝も前半戦で確実にした彼は、日本ジャンプ界だけでなく、世界の新たな歴史を切り開く存在になった。

文/折山淑美

24 【AJPS MAGAZINE vol.36】



2018年7月。アナハイムの空はどこまでも突き抜け、内野の芝がみずみずしい。

こんな日は、迷うことなくIPAだ。IPAは、「インディア・ペールエール」の略。大航海時代、イギリスのペールエールをインドに輸出する際、腐敗を防ぐために大量のホップを投入したことに端を発する。カリフォルニアの地ビール工房で作り出されるIPAをピーカンの下でゴクゴクやれば、芳醇な香りが鼻腔を抜ける。エンゼルスタジアムでこれを頼むと1杯1500円くらいする。高い！ でも、メーカーのビールではなくIPAを注いでもらう。

夢を追いかける男が好きだ。

現在、北海道日本ハムファイターズの栗山英樹監督が、まだスポーツキャスターだったころ、インタビューしたことがある。いわく、「ずっと“フィールド・オブ・ド

リームズ”をつくりたいと思っていた。夢を語り続けるうちに北海道・栗山町が手をあげる。「ウチの山に夢の球場をつくりませんか？」と。

そうして完成したのが「栗の樹ファーム」だ。栗山は地元の人たちと天然芝の野球場を作りした。ちょっとでこぼこがありボールはイレギュラーに跳ね返るが、毎年キャンプに訪れる子どもたちは大喜びで芝に寝転がり白球を追いかけている。

ひとつの夢を実現させた栗山は、「二刀流」という夢を追いかける若者の背中を押した。二刀流でいけ、アメリカで暴れるための素地を日ハムで磨け。大谷翔平は、のびのびと己のスタイルを貫き、2018年春にロサンゼルスエンゼルスのユニフォームに袖を通したのだった。

開幕からヒットを飛ばし、勝利

投手となる。華々しいデビューを飾るも、6月に右肘韌帯損傷で故障者リスト入り。国内外の批評家たちは「それ、見たことか」と眉をひそめたものだ。準備した航空券をキャンセルするという選択肢もあったが、7月、アメリカに出了かけた。

現地10日、大谷は6番DHでバッターボックスに立つ。8回、第5打席の大谷が、左腕エリアスの外角の速球をとらえた。

「カキーン！」

スタンドに快音が鳴り響いた。レフトへのタイムリーだ。思わず立ち上がり、前の席に座っていた小学生の子連れ父ちゃんとハイファイブし、一緒に「オオタニサン！」と叫んだ。

そうだよ、これが夢を追いかける男の姿だ。続けざまに叫ぶ。

「IPAを、もう一杯！」

文／宮崎恵理



©Yukihiro Taguchi



©Yukihiro Taguchi

XVIII Asiad The 18th Asian Games

August 18—September 2 Indonesia(Jakarta·Palembang)



アジア大会、濃密な16日間

文／岩本勝曉

凄まじい経済成長を象徴する巨大なビル群が塊となって押し寄せ、幾重にも連なった道路から流れ出るバイクと車がホコリと排気ガスを撒き散らす。

街中には溢れんばかりの人、人、人。だが、ひとたび裏通りに入ると、古き良き東南アジアの原風景がそこにはあった。香辛料の匂いが鼻腔をくすぐり、純粋な子どもたちの目に郷愁を覚えずにはいられない。

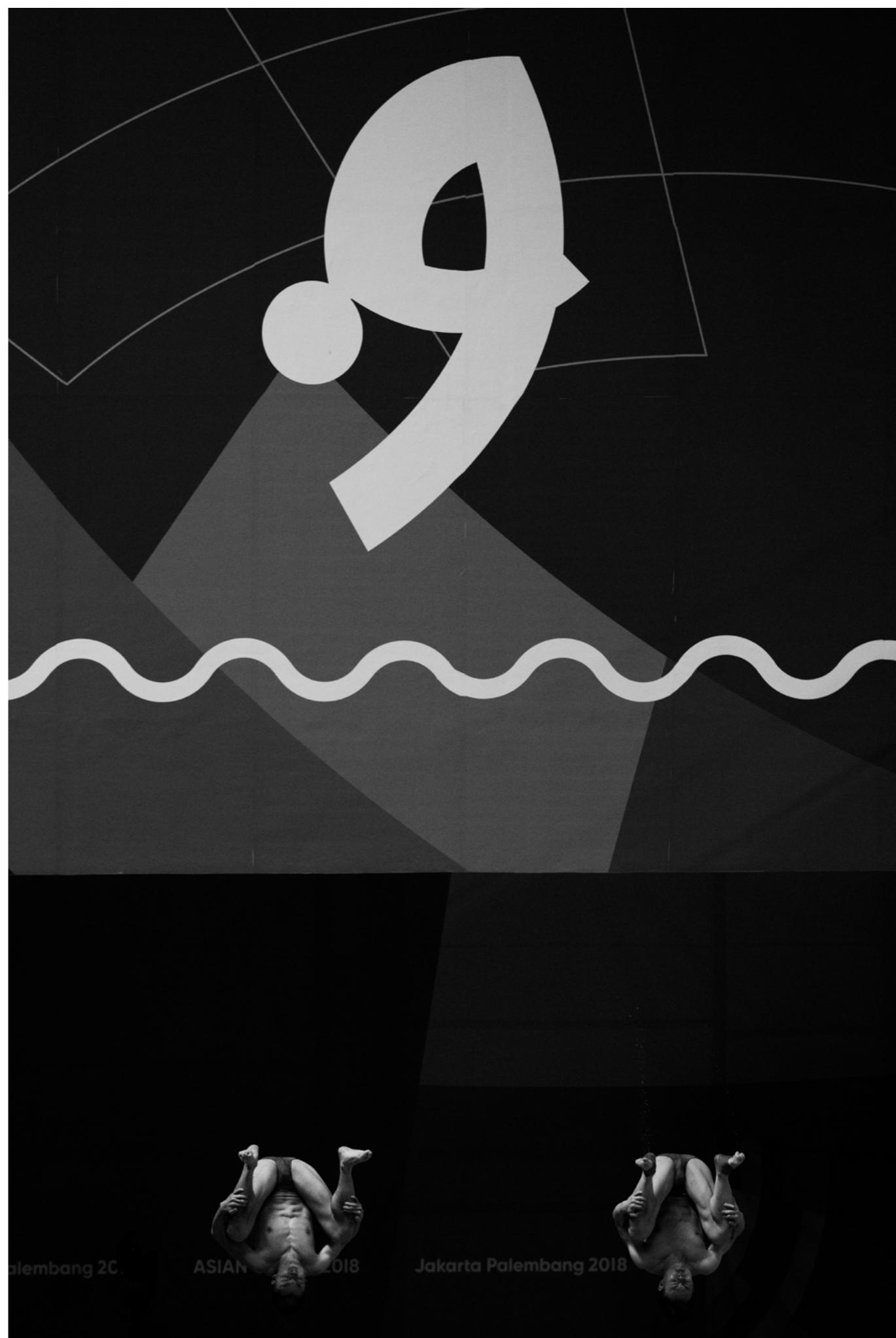
メダルラッシュに沸いた第18回アジア競技大会。日本が手にした金メダルの数は史上2位の75個にのぼった。強烈なインパクトを残したのが、日本人初の6冠を達成した競泳の池江璃花子だ。泳いだ8種目すべてでメダルを獲得、大会MVPにも選ばれた。

それだけではない。バドミントンの女子団体は48年ぶりに金メダルを獲った。フェンシングは女子フルーレ団体と男子エペ団体で2冠を達成。ホッケーは男女ともに初優勝を果たしている。丘巻の走りで20年ぶりの頂点に立ったのが、山県亮太、多田修平、桐生祥秀、ケンブリッジ飛鳥が出場した陸上の男子400メートルリレーだ。

これまでの歴史が物語るように、アジア競技大会での活躍は2年後のオリンピックに直結する。灼熱のバンコクで驚異的な記録を叩き出した98年大会の高橋尚子しかり、日本人選手として30年ぶりに世界新記録を更新した02年大会の北島康介がそうだ。

濃密な16日間を経て、日本のスポーツ界は本格的に東京五輪へと舵を切った。この勢いをつなげなければいけない。この火を、消してはいけない。

©Sonoko Tanaka



2019年型

文／早川紀子

2011年にFIFA女子ワールドカップで初タイトルを手にした。翌年のロンドンオリンピックで銀メダルを獲得すると、2015年のワールドカップカナダ大会では準優勝。彼女たちは世界の女子サッカー勢力図を大きく書き換えた。その立役者、澤穂希、宮間あやといったシンボル選手たちがピッチを去り、ゼロからのチーム作りをしてきた高倉麻子監督率いる「なでしこジャパン」が、今年フランスの世界一奪還に挑む。

高倉監督が指揮を執って3年。結果が出ない厳しい時期もあったが、昨年5月に開催されたワールドカップ本大会の出場権をかけた

AFC女子アジアカップで初タイトルを手にした。その後、監督から「心臓部」と信頼を寄せられていた阪口夢穂（日テレ・ベレーナ）が右膝前十字靱帯および半月板損傷で長期離脱となり、先行きに暗雲が立ち込めた。

阪口の離脱に加え、守備の軸である熊谷紗季（オリエンピック・リヨン）ら海外組が不在の国内組で参加した8月のアジア競技大会（インドネシア）。彼女たちには逆境に強いなしこのDNAがしっかりと引き継がれていた。映像を何度も見返しながら選手たちはどことん話し合いを重ね、選手もポジションも流動的な部分を試合の中で修正して勝機を掴

んでいた。実践で対応力と修正力を高めた「なでしこジャパン」は、もがき苦しみながらも2018年二つ目となるアジアタイトルを獲得。

そして同時期、フランスで開催されたFIFA U-20女子ワールドカップでは、ヤングなしこが大奮闘。唯一頂点に立つていな

なかつたカタゴリーで初の世界一に輝いた。この若い力の躍動はなでしこジャパンにとっても追い風となるに違いない。高倉監督が指導したU-17、U-20世代までの選手たちが成長し、プレ一面から精神面まで、多世代間で選手たちの特長を把握できていることに

始動では阪口も復帰し、ようやく選手たちにはじめた。就任当初から高倉監督が掲げていた“世界一”という目標が揺らいだことは一度もない。3年目にしてようやく選手たちにも自信が芽吹き始めた。最後の一押しはやはり若い力。世界の厚い壁をも打ち破る勢いのある戦力が不可欠だ。高倉イズムが浸透した「なでしこジャパン」の真価が問われるワールドカップは、6月にフランスで開幕する。



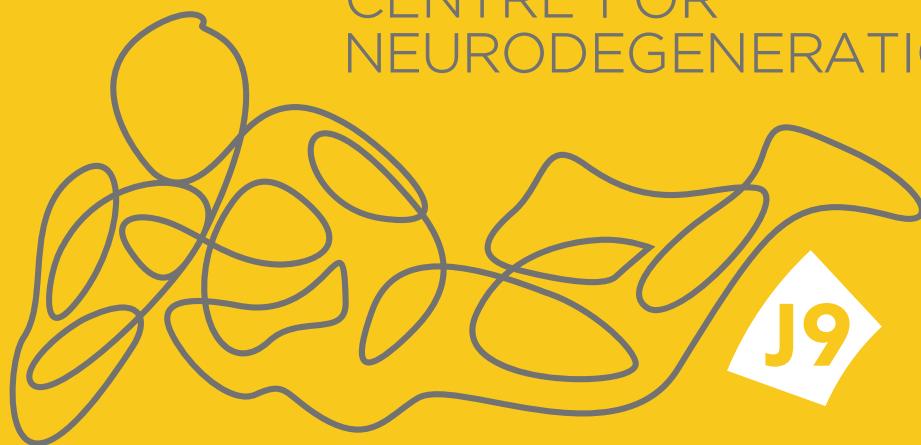
©Noriko Hayakusa



Football Renaissance

FIFA WORLD CUP
RUSSIA 2018

JOOST
VAN DER
WESTHUIZEN
CENTRE FOR
NEURODEGENERATION



チャレンジJ9

<https://www.challengej9.net/>

Joost van der Westhuizen Centre for Neurodegeneration (JCN)

<https://www.facebook.com/J9FoundationJoostvdWesthuizen>

支援先:京都大学iPS細胞研究基金

<https://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/fund/index>